

# 表現者工房

-Hyōgensha Kōbō-

通信 第四号



## 表現者のコラム Vol.4

サリngROCK (突劇金魚)

### 【自由になる】

もっと自由にしたいし、できる。なのに、非常識に見られるから、とか、みんなそうしてないから、とか、親が嫌がりそうだから、なんて考えてしまうせいで、自由にできていない。と思っています。

ところで、40歳を目前にして、タトゥーを入れました。

20代後半の頃、カジカジヘアに載っていた、耳の後にクローバーをくわえた鳥のタトゥーをいれているモデルさんに憧れ、か、か、かわいいいい、と思ってこそこそ調べた日々がありました。しかし、もうすぐ30歳、30歳からタトゥーなんて恥ずかしいよね、若者の文化だよね、それに、親に見つかってなんか言われたらつらいなあ、親じゃなくても、嫌悪感ある目で見られる確率高いん嫌やなあ……などと主に他人のせいにして、思いとどまりました。しかし10年ほど経った、39歳の私。

夏になった頃から何故か、かわいいタトゥーの画像を検索してしまう自分に気づきまして、これはまた私、憧れているぞ、また検討する時が来たぞ、となったのですが、またも不自由な考え「もう40歳やのに、若者ちやうのに、今更やんか、入れるならもっと若いうちやんか」が浮上しました。しかし、10年経った私は、もうちょっと自由になっていました。「いやいやいやいやいや、まだ人生半分以上あんねんよ！もし今60歳でも、あと20年以上あるよ！」

長いよ！ その時間、タトゥーと共に過ごしたっていいやないの！ 全然短くないよ、その時間！ 充分楽しめるよ！」と自分に言えて、それで、40歳を目前にして、ちっさいタトゥーを入れました。意味なんかない絵です。

こんなこと、たいしたことない、報告するほどのことでもないです。でも施術をした日。私にはとても重要な日に思えました。「私は、私の体を自由にできる。自由にしていい」と、実感したからです。私の体は私のもの。私は自分の体に、一生消えない無意味な絵を刻み込んでいいのです。私はあの日、新しい私になりました。これからあとの人生半分以上、新しい私で生きて、新しい私で表現していきます。いえいえ、他の人から見たら、本当に全然たいしたことではないんですけども。



サリngROCK  
(突劇金魚)

## レビュー

自主企画公演



2019年6月22日(土)～24日(日)

IKSALON 表現者工房三周年シリーズ  
市民参加「現代・リーディング6」

「あなただけ元気」

脚本・演出・構成:古川貴義 (箱庭円舞曲)

鮮烈な物語と斬新な演出で現代を切り取る古川作品を、初めて表現者工房でリーディング上演した。その残酷な結末に向けて、登場人物は休む暇無く日常を働いている。大阪には無かったタイプの作品だけに、作品を楽しむ観客も多かった。



2019年7月27日(土)～30日(火)

演劇落語「皿屋敷」「死神」

脚本・演出・構成:矢内文章  
(アトリエ・セントーカーフォワード)  
出演:坂口修一、矢内文章

肥後橋セミナールーム、初めての演劇公演。

矢内文章と、坂口修一が、古典落語を演劇にして、対話で見せること、観客席とも対話することに挑戦！



2019年10月13日(日)・14日(月祝)

komatsu de cocktail  
～演劇とバーテンダーの競宴～

企画・製作:一般社団法人表現者工房 池田直隆

東西バーテンダーの揃い踏み、市民参加演劇ワークショップ、演劇落語の三部で構成されたマルチプレインベント。特に市民参加のイベントは舞台にも観客を上げる趣向になっていて、参加者も楽しんでいた。演劇落語は、同演目をこの後も含め、高松、東京も周り、四都市の公演となつたが、こと栗津演舞場でも大好評だった。

### 制作協力公演

2019年9月13日(金)～15日(日)

タテヨコ企画第37回公演

「谷繁」



脚本・演出:横田修  
出演:市橋朝子  
加藤和彦  
館智子  
西山竜一  
久行しのぶ  
撮影:神山靖弘

何度も再演された横田修氏の『谷繁』を、初めて本人の演出で、表現者工房で上演された。館智子が、タイトルロールを演じた。この役を女性が演じたのは初めてだが、どこか憎めない不思議な存在を好演していた。ほか一作品との二本立て。

2019年11月16日(土)・17日(日)

劇団新人類人猿

「人や銀河や修羅や海胆は」



演出:若山知良  
出演:茶谷幸也  
今井淑恵  
山下大輔  
中川誠  
木村日菜乃  
撮影:高津吉則

金沢の秘宝とも言える前衛劇団が30年の沈黙を破り、初めて大阪公演を果たした。宮澤賢治の『春と修羅』からエクスピアされた、銀河や、修羅のイメージが、嵐のように観客を襲う。太田省吾をリスペクトし続けて来た彼らの真髄とも言える舞台に観客は酔った。